表現音読を通して学生と共に文学作品を読み楽しむ

Making Words Come Alive

浅野　享三

はじめに

英文学は英語教育に不適と言わんばかりの声がある。文学作品の利用は技能育成中心の授業には「非常識」なのだろうか。シンポジウムで検討を試みたのは，登壇三者が異なる立場から教科書掲載の同じ文（NEW CROWN 3,“A Present for You”）を三様に扱い，そのような「常識」を疑うことだった。筆者はこの掲載文の原文である O. Henry 著“The Gift of the Magi”を大学の授業で Readers Theatre（音読劇）用台本にしてパフォーマンスを経験していることから，学生と共に文学作品を楽しむための音読劇用台本作りについて発表した。この方法で中･高授業でも教科書掲載文を適切に台本化し，表現音読を通して聴衆に発表する方法を明らかにした。

Readers Theatre (RT) の応用が好ましい理由

日本の中・高・大の英語授業（以下，外国語授業）にとって RT が好ましい理由を端的に表すと，制約の多い外国語授業事情に適応し，かつ学習指導要領が求める外国語教育に相応しいからである。

１．【教科書をそのまま利用できる】検定済み教科書かどうかを問わず，教科書として導入される本は指導する学年・学科の題材として適している。RT 実践のためだけに新たな本を探す必要がない。

２．【本文を変更せずにそのまま使用できる】シンポで提案した IRT [注]方式では，原文を修正や変更することなくそのまま使用するために，指導済みの語彙や文法を含む教科書本文を利用できる。

３．【いつもの教室で大道具・小道具，衣装，照明などなしで実施できる】舞台がなくとも，教室前方にスペースを作り，発表者は横に並び，表現音読とジェスチャーや表情などの非言語表現利用で実施できる。

４．【台本化の過程で十分な読解力を育成できる】本文全体を登場人物のセリフとその語り手のセリフに分けることから，文法力と語彙力，言外の意味まで読み解く総合的な理解力と解釈力を育成できる。

５．【音読練習で流暢さに加え，文脈に即したプロソディーが身につく】台本化により表現音読の技術を用いて聴衆に向けて発表できる。台本の暗記なしで，伝えることを目的とした効果的な音読法が身につく。

６．【非言語表現を活用したコミュニケーション力を育成できる】効果的な表現には表情，視線の向き，ジェスチャー，身体の動きが欠かせない。台本を音読しながら，内容に合わせた非言語表現を学べる。

７【全ての過程で助け合い，協同する力を育むことができる】全過程でグループワークを基本とする。意見交換が確かな本文理解につながり，音読が得意な生徒は先生役としてサポートする側になれる。

８．【他者の発表を鑑賞することで，自らを客観的・批判的にとらえられる】他グループが演じる同じ発表との比較から，良い点や改善点だけでなく，他者の発表に共感したり感動することができる。

９．【発表を振り返るとき，1 人では得にくい達成感と一体感を得られる】過去に RT を経験した生徒や学生の多くが「個人発表とは違う達成感と一体感が得られた」と述べている。筆者の調査でも明らかである。

１０．【文学的な作品を面白いと感じ，さらに読みたいという動機が高まる】発表のために深い解釈をして音読を繰り返すことで，静的な文字情報としての文学作品が，動的で立体的な映像のように変化することを味わえる。このことからも英語による文学作品が少し身近な存在になる。

注）Institute for Readers Theatre, San Diego, CA, USA のこと

Readers Theatre (RT)の定義とその日本語訳

代表的な定義を 3 つ引用する。まず，IRT 代表を務めたことがある Adams は，RT とは「表現音読の原則とその技法を用いて見えないものを想像させるパフォーマンス（presentational performance based on principles and techniques of oral interpretation）」としている。次に，「即興ではなく台本を練習をしてからグループで読み上げるパフォーマンス（a rehearsed group presentation of a script that is read aloud rather than memorized）」（Flynn），そして 3 つ目として「4 技能を統合した文学作品の表現音読（integrated language arts event centering on the oral interpretation of literature）」（Sloyer.）という定義もある。なお，RT の訳語として筆者は「音読劇」を使用することが多い。日本語には「朗読劇」や「群読」と呼ばれる発表があるが，それらは前述した RT と似ている部分もあるが全く同じではない。外国語教育では，小・中・高を通して「音読」の方が一般的と判断し，学校での利活用を意識する意味もあることから「音読劇」としている。

IRT 方式による台本化

教科書掲載文である以下の部分を，Reader 1: Narrator for Della, Reader 2: Della, Reader 3: Narrator 3 for general narration の 3 名で読む台本にした例である。 なお, 紙幅の都合でシンポジウムで用いたスライドとは異なり，掲載文から 3 名用台本に変化させる過程は省略している。黄色部分は主語の they が Jim と Della を指していることから，後段に登場する Jim の語り手と Della の語りである Reader 1 の両方で同時に読むことを示す。

> One dollar and eighty-seven cents. That was all. Della counted the money again. One dollar and eighty-seven cents. The next day was Christmas. Della wanted to buy a present for her husband, Jim, but they were poor. One dollar and eighty-seven cents was not enough. She stood by the window and looked out. It was snowing. She saw a large gray cat that had large gray eyes. It was walking slowly on a gray fence in the gray yard. Everything looked gray. (p.122)

上述した IRT 方式による台本化例は，語り手（Narrator）と登場人物（Character）を分けている。原則として登場人物の数だけ語り手を用意する。このパートに登場する Della の語り手として Reader 1 を，そして必ずしも Della の語りではない部分を担当する語り手 Reader 2 と Della 自身である登場人物 Reader 3 を置く。教科書文は複数名で音読するために書かれた文ではなく，登場人物のセリフが少ない。たまたま上で引用した箇所には全くない。外国語授業の進行を考えると，なるべく多くの生徒に「意味のある」関わり方をさせたいと目論むことから，3 名で読める台本とした。ここで「意味のある」とは，機械的に 1 文ずつ音読をさせることではなく，語り手が登場人物のありようを文脈に照らして活き活きと語る，ということである。

IRT 方式の特徴と留意点

最大の特徴は，台本は教科書文の通りである。前述例でも，一切の修正変更はない。これは「原文を尊重しなければならない（Scriptmaking must respect the text）」という考え方で，作者が一言一句を紡ぎ出すためにした努力を重んじるからである。また，この考え方は RT を応用する普段の授業にとっては好都合である。文法や語彙学習を含む内容理解の後で掲載文をそのまま利用できるだけでなく，RT のための音読も台本の初見で可能である。具体的な留意点として，語り手と登場人物の読む部分を分ける際に，①原文中の動詞の時制はそのまま維持すること（Verb tenses should be retained, not changed from past to present），②原文中の代名詞はそのままとすること（Pronouns should be kept unaltered），③各読み手の登場回数や分量の著しい片寄りの解消を目指すこと（Distribution of parts should be approximately equal）などがある。

まとめにかえて

筆者の今回の眼目は，生徒・学生が日常的に接する教科書文に親しみを持ってもらうための手立てを提案することだった。とりわけ英文学は教材として「宝の山」であり，文学的作品を活用する外国語授業が十分に可能なことを示す狙いもあった。RT の応用授業は，実用技能育成と矛盾する方法ではない。むしろ生徒の滑らかな音読を促進し，語彙力を増強し，深い理解に基づく非言語表現力を養い，グループワークによる一体感や達成感を経験させられることから判断すれば，これからの時代に求められる「知識・技能」を修得し，「思考力，判断力，表現力等」を育成するのに適した方法と言える。学習指導要領に見る「社会や世界とどのように関わりより良い人生を送るか」などという目標は，正に古今東西を問わず，文学のテーマそのものではないだろうか。今回のシンポジウムは，同じ英文を 3 者が異なるアプローチで「料理する」という試みであった。何かしらの調理は試みたものの，果たして食するに相応しい出来ばえだったかどうか，またもう一回食べたくなるのかどうかは，食べた人にしか分からないであろう。

References

Adams, W. (2003). I*nstitute book of readers theatre: A practical guide for school, theatre, and community*. Chapel Hill, NC: Professional Press.

Flynn, R. (2004). Curriculum-based readers theatre: Setting the stage for reading and retention. *The Reading Teacher, 58*, (4)

Sloyer, S. (2003). *From the page to the stage –The educator's complete guide to readers theatre.* West Port, CT: Teachers Ideas Press.